

キリスト教と韓国語

徐 正敏 (ソ・ジョンミン)

訳：辻野 裕紀 (つじの・ゆうき)

1. キリスト教とアジア
2. 韓国に伝来したキリスト教
3. ハングル聖書と伝道文書の翻訳史：
 ハングルとキリスト教の直接的な出会い
4. キリスト者の韓国語，ハングル保護活動
5. 韓国語文学とキリスト教
6. キリスト教の韓国語用語の生成，展開，教派別の差異
7. 韓国語神学の歴史と現況

1. キリスト教とアジア

キリスト教は、イスラエルのユダヤ教の伝統を背景に、イエス・キリストを教祖とし、その教えを信念化して形成された、世界的宗教にして、思想体系である。人類史上、あらゆる方面において最も大きな影響力を及ぼした、主要な宗教のひとつであり、現在まで最も有力な宗教の位置を占めている。

キリスト教は、イエスが教祖であり、その教えが核心ではあるが、イエスの時代に思想、信念全体がすべて完成したわけではない。ヘブライズム(Hebraism)と呼ばれる、ユダヤの宗教、歴史、思想の伝承を基盤に形成されたキリスト教の初期の信仰体系が、ギリシア・ローマ世界へと展開され、いわゆるヘレニズム(Hellenism)と結合しながら、現在の我々が接する、歴史的なキリスト教の根幹を形成した。このことをキリスト教の経典である聖書を中心に言えば、旧約聖書と新約聖書の思想的融合と歴史的展開という文脈を意味するものでもある。

キリスト教は、最初は特に、少数、辺境の信仰共同体であった。のち、300年以上のギリシア・ローマ世界への宣教、激甚なる受難と殉教の歴史を経て、世界宗教へと飛躍を遂げた。313年にはミラノ勅令(Edict of Milan)によって、ローマ帝国の公認宗教として宣布され、新たなる段階を迎える。しかしながら、これと前後し、キリスト教は各地域、各分派間の神学思想的な違いのみならず、政治経済的な問題によって、論争や葛藤、戦争に巻き込まれていった。ついには、同じ

キリスト教でも、互いに異なる教理解釈、儀式、制度を有する様々な教派へと分裂を遂げた。その代表的な3つの教派が、カトリック教会(Catholic)、東方正教会(Eastern Orthodoxy)、プロテスタント教会(Protestantism)である。

アジアの西端であるパレスチナ地域に始まるキリスト教は、主な宣教ルートを西へとり、ギリシア・ローマ世界へと展開して、西欧社会の中心的な宗教となった。一方、初期のキリスト教の使徒のうち、トマス(Thomas)とバルトロマイ(Bartholomew)は、東方への宣教、すなわちインドにまで至り、キリスト教の1分派をなしたという記録がある。さらには、トマスによる中国伝道説も一部に膾炙しているが、確たる歴史としての証拠は乏しい。それ以降も、キリスト教の1分派であるシリア教会が景教という名で中国の唐の時代に、また同系統の分派が元の時代に也里可温(야리가온)という名で広がったりもしたが、続きはしなかった。また、ローマ帝国と中国との交流・交易の過程で、カトリックの^{かんけつてき}間歇的な東方接触があった形跡がある。

キリスト教が本格的に東方へ伝来したのは、宗教改革以降の16世紀、特にカトリックの自主的な教会改革のプログラムのひとつとして実践された世界宣教活動以降である。これは、1534年のカトリック最初の宣教団体であるイエズス会創設と深い関わりがある。イエズス会設立者のひとりである、フランシスコ・ザビエルが、アジアへの初の宣教師として、インドとマレー諸島を経、1549年8月15日、日本の鹿児島に到着した。このことは、とりわけ、日中韓、東アジア地域における近代キリスト教史の出発点と見做し得る出来事である。

その後、イエズス会が中心となって、日本や中国で本格的なカトリック宣教史が展開され、その初期には刮目すべき成果を収めもした。

2. 韓国に伝来したキリスト教

日本と中国には、既に16世紀にカトリックが伝来していたものの、徹底的な鎖国政策とともに、儒教根本主義を志向していた朝鮮では、キリスト教の伝来が顕著に遅れた。朝鮮が初めてキリスト教、すなわちカトリックに接触したのは、1592年の文禄の役(임진왜란)当時と記録される。つまり、日本の朝鮮遠征軍のうち、^{こにしゆきなが}小西行長部隊がキリシタン部隊であり、彼らの長期駐屯中、1593年に従軍神父としてスペインの宣教師セスペデスが来韓した。勿論、セスペデスは、遠征軍の従軍神父として、朝鮮人捕虜の一部と接しただけで、韓国人への宣教は行っていない。

したがって、韓国とカトリックの本格的な交流関係は、1636年の丙子へいしの乱(병자호란)の頃からと見られる。清の人質として捕らえられた朝鮮の王子昭顯ソヒョン世子が北京のイエズス会宣教師たちと交わり、帰国の際には、カトリックに関する書籍や物品が一部搬入された。この時から、韓国語でカトリックを指す語は、「성교(聖教)」、「천주학(天主学)」、「천주교(天主教)」、「야소교(耶蘇教)」などとなり、いずれも中国語文献の音訳だったものと思われる。しかし、このような用語はすべて中国文献の記録に過ぎない。

韓国人の著作のうち、キリスト教についての内容が記録された最初の文献としては、18世紀に著わされた、朴趾源パクチウォンの『熱河日記』ヨルハイルギが挙げられる。そこでの表現は勿論、漢字で「耶蘇教」である。しかし、より重要なことは、早くも17世紀初頭から朝鮮の実学派の学者たちの間で、いわゆる西学研究が始まっており、西学とはとりもなおさずカトリック思想を意味したという点である。そして、実学派は、のちに、カトリックを排撃する攻西派と、カトリックを信仰として実践する信西派とに、分かれることとなる。特に信西派の一部は、既に1770年代から信仰実践の共同体を形成して、カトリックの教理を整理し、信仰の規準となる文書の作成も行なっている。とりわけ、1779年に李檠イビョクの手になる、純ハングル文、つまり漢字を用いず、ハングルだけで表記された信仰歌詞「天主恭敬歌(천주공경가)」、丁若銓チョンヤクチョンなどの「十誠命歌(십계명가)」などには、「천주(天主)」という用語がハングルで表記されていることが見取れる。したがって、朴趾源の『熱河日記』以前にも既に、韓国の西学研究家とその信仰実践家たちの間では、漢字、ハングルを問わず、西学、天主、天主学、あるいは天主教などといった用語が広く用いられていたものと考えられる。

その後、韓国カトリックは、自発的な信仰共同体、さらには、ローマ教皇庁の派遣によって到来したフランス系宣教団体「パリ外国宣教会」の活動によって、大きな発展を見せた。しかし、儒教根本主義国家たる朝鮮のカトリック迫害政策と、様々な政治的な関わりによる幾度ももの大きな困難によって、世界の宣教史上、類を見ない「血の歴史」を創出した。こうした朝鮮カトリックの殉教受難の歴史は、日本や中国と異なり、適応主義的な宣教方法、すなわち、土着的宣教と文化的融合を追求していた宣教団体である「イエズス会」が解散した後、代表的な排他的宣教神学、すなわち「ウルトラモンタニズム」(ultramontanism)の典型をなしていた「パリ外国宣教会」の宣教の方法とも関連がないわけではない。

カトリック以降、19世紀中葉からはプロテスタントの韓国伝来が進行し、つい

に 1880 年代以降、本格的なプロテスタント受容時代の幕開けを見る。プロテスタントは、韓国では多く「개신교 (改新教)」と呼ばれ、時には「기독교 (基督教)」という、本来は、先に述べた、キリスト教の主要 3 教派を総称する語を以て、専らプロテスタントを指し、カトリックと区別したりもする。そして、カトリックとプロテスタントの双方を称呼する際には、「신구교 (新旧教)」という語を用いる。

プロテスタントの中には、さらにその特徴上、様々な分派的教派名が登場する。韓国の主たるプロテスタントは、長老教、メソジスト (監理教)、聖公会、聖潔教、バプテスト (浸礼教)、安息教、五旬節などだが、その受容伝来の歴史的経緯は各々異なっている。そして、その大部分は、中国や日本で作られた漢字表記の分派名をそのまま音訳して用いており、それらを全て合わせて、先述の通り、「개신교 (改新教)」、あるいは、広義の「기독교 (基督教)」という語で汎称する。

これまで見てきた、カトリックやプロテスタントとは異なり、東方正教会の韓国伝来史は^{びょう}眇たるものである。夙に朝鮮末期にロシアを通してロシア正教会という名で伝来したけれども、その後の政治外交的環境によって、辛うじて命脈を保っている状態であり、最近になって、一定の組織整備が進んでいる程度である。以上のことを通覧すると、韓国のキリスト教受容は、キリスト教の主要 3 教派のうち、カトリックとプロテスタントが中心であり、^{たいせい}大勢であったと目さねばならない。

3. ハングル聖書と伝道文書の翻訳史：ハングルとキリスト教の直接的な出会い

韓国のカトリック、すなわち天主教は、教理実践と宣教方法の特性上、初めから直接的、全面的な聖書翻訳を行なわなかった。勿論、部分的な信仰指針書の編纂過程で一部、聖句の翻訳はなされた。これに対して、プロテスタントの場合は、初期の頃から宣教と聖書翻訳の歴史が一致している。とりわけ、韓国のプロテスタントの宣教と受容は、ハングルで書かれた韓国語聖書への翻訳の歴史を、第一にしたものだった。かかる過程において、文字体系としてのハングルは、韓国プロテスタント史の最も重要な牽引車であり、ハングルもまたプロテスタントと一緒にすることではじめて韓国宗教思想史において、重要な文字としての役割を忠実に果たすこととなったのである。

筆者は、韓国プロテスタントの宣教過程を大きく北方宣教ルートと南方宣教ルートに区分する。これは他の要素も含む区分だが、宣教師が朝鮮半島に渡来する

前に国外で進められた、ハングル聖書翻訳の経路とも大きく関わっている。

まず、北方宣教ルートは、1870年代から1880年代に、朝鮮半島の北方、満洲で、スコットランド長老教宣教師と韓国人協力者によって進められた、ロス(John Ross)の聖書翻訳がその嚆矢である。彼らは、禁教状況の韓国に外国人宣教師が直接入り宣教活動をするのではなく、国境の外で韓国人貿易商の助けを得、まず先に韓国語の民衆文字たるハングルで聖書翻訳を推し進めた。宣教師ロスは、韓国人商人の李応^{イウンチャン}賛の協力で1877年に、初の韓国語教材である“Corean Primer”(韓国語初歩)の刊行も行なっている。その後、ロスは同僚の宣教師マッキンタイヤー(John MacIntyre)や韓国人の徐相^{ソサンニョン}崙などの力を借りて、ヨハネ(요한), マルコ(마가), ルカ(누가)による福音書などの翻訳を順に進め、書物として出版するための手筈^{てはず}も整えた。日本の横浜で鑄造された35,563個の音節別ハングル鉛活字を基に、満洲は瀋陽の文光書院においてハングル聖書の刊行準備に入っていた。聖書の印刷に先んじて、1881年9月には『예수성교문답(耶蘇聖教問答)』と『예수성교요령(耶蘇聖教要領)』を刊行したが、これらは本格的にハングルで刊行された最初のキリスト教文書と云う。ほどなく、1881年末からは『예수성교누가복음전서(耶蘇聖教ルカ福音全書)』を皮切りに、ハングル聖書が次々に刊行され、1887年には新約聖書のハングル完成本『예수성교전서(耶蘇聖教全書)』の刊行を見た。

一方、満洲のロスチームのハングル聖書翻訳と刊行作業過程に関わった韓国人協力者たちは、みづからキリスト教信仰を告白することとなり、ついには勸書伝道人^{ムン}となり、祖国伝道に乗り出した。徐相崙^{ソギョングジョ}、徐景祚^{ベクホンジュン}兄弟、白鴻俊^{ベクホンジュン}などが中心となり、キリスト教の布教が禁じられている状況において、命懸けの伝道活動を遂行したのである。彼らは自身の出身地である西北地域の宣教ルートを開拓し、義州^{ウイジュ}、平壤^{ピョングヤン}、黄海道^{ファンヘド}の長淵^{チャンヨン}、そしてソウルに至るまで、伝道の拠点を設定した。これはすべて西欧からプロテスタントの宣教師が来韓する以前のことで、韓国プロテスタントの歴史において、特記すべき事項であることは間違いない。

翻って、南方宣教ルートは、在日アメリカ人宣教師、日本の初期のクリスチャン、韓国人留学生の李樹^{イスジョン}廷を中心に展開された、韓国のプロテスタント宣教過程である。ここでも韓国語への聖書翻訳活動が中心となった。旧韓末²⁾の高官の

-
- 1) 初期韓国プロテスタントの伝道時代、ハングル聖書やハングル伝道文書を売りながらキリスト教の福音を伝える仕事を担当した人々のこと。
 - 2) 【訳者註】朝鮮末期から大韓帝国までの時期。

ひとりで、^{ヤンバン}両班貴族であった李樹廷は、日本の近代文物を学ぶ目的で日本へと渡った。具体的には、近代農学を探究し、故国の農業改革を図らんとするのが主たる目的であり、日本に到着すると、時を移さず、農学者の^{つだせん}津田仙に会った。しかし、初期のプロテスタント信者であった津田からは、まずキリスト教についての教示を受けることとなった。その教えは主に、イエスの福音の核心、とりわけ、^{さんじょう すいくん}山上の垂訓（산상수훈）についてであった。爾来、李樹廷は津田の紹介で、多くの日本人のプロテスタント指導者や在日宣教師と出会うこととなった。本人自らも、^{はんどく}聖書を繙読して、キリスト教の核心的な教えに近づき、^{やすかわとおる}渡日翌年の1883年4月29日には、日本人牧師の安川亨から受洗した。そして、同年5月には、第3回日本全国基督教徒大親睦会に来賓として招請され、著名なクリスチャンたちと交わり、韓国語の代表祈祷と信仰告白文の発表なども行なった。

また、長老教の宣教師ノックス(G.W.Knox)、米国聖書公会日本地域総務ルーミス(Henry Loomis)、メソジストの宣教師マクレイ(R.S.Maclay)などとも交誼を結んだ。この過程で、アメリカの宣教本部に、韓国への宣教師派遣を要請する書信を送るなど、韓国のプロテスタント受容に大きく寄与した。実際に宣教関連雑誌に掲載された李樹廷の宣教師要請の書信を目にした長老教のアンダーウッド(H.G.Underwood)やメソジストのアペンゼラー(H.G.Appenzeller)などが志願し、彼らが事実上韓国初のプロテスタント宣教師として来韓することとなった。

しかし、李樹廷の日本における活動で最も重要なポイントは、やはり聖書の韓国語への翻訳にある。特に、米国聖書公会に所属していた宣教師ルーミスは、李樹廷と共に聖書の韓国語への翻訳を試みたが、李樹廷の聖書の韓国語翻訳への着眼は、満洲地域で進められたそれとは主眼点が異なった。満洲のロス訳の韓国語聖書が、純ハングル文に聖書を翻訳し、韓国の普通の平民や民衆を読者、すなわち伝道の対象としたものであったのに対し、李樹廷と日本における聖書の韓国語翻訳は、韓国の有識者層、すなわち両班階層を主たる対象とするものであった。そこで、李樹廷はまず、純粹なる韓国語翻訳に先立ち、漢文聖書に韓国式の吐^トを付す懸吐^{けんと}漢韓聖書の作業を急いだ。³⁾ 李樹廷の懸吐作業は1883年6月末には既に終了し、1883年11月から1884年8月にかけて編纂、刊行された。読者を徹底的に両班識者層に絞ったものであった。さらに、様々な階層の韓国人に聖書を

3) 【訳者註】吐（ト：と）は、漢文の訓読時に付す送り仮名の類。漢文に吐を付すことを「懸吐」と言う。本書 pp.335-370、鄭在永・安大鉉「漢文読法と口訣」参照。

読んでもらう目的で、国漢文混用体⁴⁾の韓国語聖書の開板も計画した。これには、最も簡潔にして含蓄のある表現上の特徴を持った、マルコによる福音書（마가복음서）が初めて採択された。1884年4月までに翻訳作業は完了し、1885年2月に日本の横浜で李樹廷訳の国漢文混用体のマルコ福音書『마가가 전한 복음서언해（マルコが伝えた福音書諺解）』が上梓された。満洲のロス訳聖書とともに、韓国語聖書の別なる地平を切り拓く画期的な聖書刊行であった。この聖書は、韓国プロテスタント初の宣教師アンダーウッドとアペンゼラーが韓国に派遣される際、日本に立ち寄り、既に翻訳、刊行された韓国語の聖書を持って、宣教地へ向かうという、特別なる出来事を創出した。これは、キリスト教宣教史上初めて、宣教地に入る宣教師が既に現地の言語で刊行された聖書を持って臨地へ向かうという、空前絶後のことであったからである。

そして、聖書翻訳者の李樹廷は、孫鵬九^{ソンボング}に続き、2人目の東京外国語学校（現在の東京外国語大学）の韓国語教師として、日本における韓国語教育の先駆者としての役割も果たし、多数の韓国語教材の編纂にも関与したという記録が伝えられる。

一方、1885年以降、韓国に定住したプロテスタントの宣教師たちは、初めは、満洲で刊行されたロス訳聖書を改訂し公認聖書として用いる計画を立てていた。しかしながら、西北地域の方言が非常に強いロス訳聖書の語彙の問題や、その他にも提起されたいくつかの難題により、全面的な再翻訳の方向へと方針を転換した。そこで、1887年、ソウルに聖書翻訳委員会(Committee for Translating the Bible into the Korean Language)を組織し、新たに韓国語聖書の翻訳を順に進めていった。やがて1900年、新約聖書全体の翻訳が完成、刊行され、翻訳作業がより困難な旧約聖書も1910年に完成した。これをもって、1910年、韓国語で新約聖書、旧約聖書の双方が完刊する快挙をなしたことになる。以降、韓国語聖書は、時代的な流れや、正書法と文法体系の変化によって、継続的に改訂され現在に至っている。勿論、公認翻訳の伝統的な流れ以外にも、目的の相異なる様々な翻訳が登場し、教派別、あるいは個人によって推進、刊行された私訳もあまた登場した。

一方、聖書と並んで、キリスト教の重要な文書は讃美歌である。1892年、メソジストによって韓国語に翻訳、刊行された「찬미가（讃美歌）」が最初の韓国語の

4) 【訳者註】 ハングル（国文）と漢字を混ぜて書かれた文章のこと。

讃美歌であり、その1年後、長老教では「찬양가 (讃揚歌)」という名の韓国語の讃美歌が刊行された。その後も、長老教の「찬성시 (讃聖詩)」、1908年の長老教・メソジスト連合の「찬송가 (讃頌歌)」, 続いて、「신정찬송가 (新訂讃頌歌)」, 「신편찬송가 (新編讃頌歌)」, 「개편찬송가 (改編讃頌歌)」, 「합동찬송가 (合同讃頌歌)」, 「통일찬송가 (統一讃頌歌)」などが相次いで刊行され、韓国プロテスタントの連合的な中心的讃美歌の役割を果たした。その他にも、バプテスト系の「福音讃美 (복음찬미)」, 聖公会の「성회송가 (聖会頌歌)」, 「천도찬사 (天道讃辭)」, 救世軍の「구세군가 (救世軍歌)」, 聖潔教系統の「복음가 (福音歌)」, 「부흥성가 (復興聖歌)」などが刊行された。

キリスト教の韓国語文書は、聖書と讃美歌のみにとどまらない。各種の伝道文書、教理解説書、神学書なども発行されたが、これらはすべて、韓国語の近代出版史の先駆的な位置を占めるものであった。プロテスタント連合出版機関として、韓国聖教書会（現在の大韓基督教書会）は、キリスト教の韓国語出版活動の中心的な役割を果たしてきた。

のみならず、キリスト教と近代の韓国語関連領域でさらに大きな貢献をしたのは、キリスト教系の新聞や雑誌などといった定期刊行物である。1897年にメソジストが刊行した「조선그리스도인회보 (朝鮮キリスト人会報)」や長老教の「그리스도신문 (キリスト新聞)」は各々週刊紙で、韓国語新聞のひとつの流れを形成した。このふたつの新聞は、1905年に統合され、教派連合の「그리스도신문 (キリスト新聞)」となり、のちに、代表的な初期プロテスタントキリスト教系新聞である「기독교신보 (基督新報)」と合併した。一方、カトリックでは、1906年に「경향신문 (京郷新聞)」が創刊され、救世軍も自派の新聞として「구세신문 (救世新聞)」を刊行した。また、雑誌も多様な足跡を残した。1900年にはメソジストが最初のキリスト教誌「신학월보 (神学月報)」を創刊し、1906年には、同じメソジスト系の総合雑誌である「가정잡지 (家庭雑誌)」を発刊、聖公会は1908年に「종교성교회월보 (宗古聖教会月報)」などを順に刊行した。また、各教派の神学と信仰の雑誌、具体的にはメソジストの「신학세계 (神学世界)」, 長老教の「신학지남 (神学指南)」, 聖潔教の「활천 (活泉)」, 安息教の「교회지남 (教会指南)」, 救世軍の「사관 (史官)」, さらに他にもクリスチャン個人雑誌として金教臣^{キムギョジン}とその同人たちの「성서조선 (聖書朝鮮)」などが陸続と創刊され、韓国の近代雑誌の重要な系統をなした。

以上概観した、初期の韓国キリスト教の聖書、讃美歌、単行本、新聞、雑誌の

活動以外にも、キリスト教系の社会啓蒙活動のうち、ハングル教育、夜学、教会内での間歇的な演劇、音楽会、文化活動などを通して、キリスト教は、韓国語の近代的な整備と体系の進展に大きな寄与をしたものと評価される。

一方、キリスト教の宣教師たちは、宣教活動をする自らの必要性、さらには聖書の翻訳など、韓国語の文書活動の基盤の造成のために、ハングル、韓国語の、世界の言語との疎通、交流にも大きく寄与した。その代表的な例が辞書の編纂である。最も代表的なものは、カトリックのフランス人宣教師であったリデル(Felix Clair Ridel)司教の『韓仏字典(Dictionnaire coréen-français)』である。この字典は、1877年に横浜で印刷作業が行われており、1880年『日本の声(Echo du Japon)』という雑誌を刊行していたレビー印刷所から出版されることとなった。判型は四六倍判で、694頁、約11万語が収録されている。韓国最初の近代的な韓国語関連辞書だが、これと並行して作業が行なわれた韓国語の文法書『韓国語文典(Grammaire coréenne)』とともにカトリックが韓国語に直接寄与した代表的な成果である。これらの書物は、カトリック宣教師たちのみならず、のちに、プロテスタント宣教師たちの韓国語学習や文書活動にも大きく裨益した。また、プロテスタントには、韓国最初の宣教師のひとりであったアンダーウッドが著わした『韓英字典(A Concise-Dictionary of the Korean Language in two parts Korean-English & English-Korean)』がある。1890年に2巻本で刊行され、幾度も版が増補された。これもまた日本で製作刊行されたが、やはり韓国語の国際化、外国語との疎通、韓国語の辞書編纂などにおいて、貴重な基礎的貢献をした。

畢竟^{ひっきょう}するに、近代以降、韓国語、ハングルとキリスト教との関係は、互いに寄与し合うプラスの関係であった。

このことについて、代表的な韓国語学者である崔鉉培^{チェヒョンベ}は、関連論文(「기독교와 한글 (キリスト教とハングル)」、『神學論壇』、第7輯、연세대학교 신과대학, 1962年10月、72-76頁)で、次の如く整理した。

まず、キリスト教がハングルに対して益した項目として、1) ハングルの民衆伝播を牽引した。2) ハングルを通じた高尚な思想の表現を可能にし、ハングルの文字としての自尊を高めた。3) ハングルに対する尊敬と、ハングルを守ろうとする意識を拡散させた。4) ハングルの科学的体系とその価値を新たに発見させた。5) ハングルの世界伝播に寄与した。6) ハングル専用についての認識を拡散させた。一方、ハングルがキリスト教に対して益した側面として、1) 非常に学びやすく、書きやすいハングルのおかげで、キリスト教が大変伝播しやすくなった。2) 韓国

キリスト教の神の呼称を、固有語の「하나님 (하느님)」と表記可能にすることで、韓国の伝統的な「天 (하늘)」唯一神信仰とキリスト教信仰とを自然に結び付けることができた。

このような評価は、単純にハングルがキリスト教の伝播手段や媒体としての役割に留まらず、信仰、神学的思想の表記の有効性の側面においても寄与したということを意味するものと思われる。

崔鉉培のこうした議論は、キリスト教とハングルとの関係をめぐる、最も古典的にして権威ある評価として広く認められている。

4. キリスト者の韓国語, ハングル保護活動

近代以降、数多の韓国語学者、運動家がクリスチャンであった。彼らは、日本統治時代 (일제 강점기) にハングルと韓国語の抹殺政策に^{あらが}抗い、ハングルの保護、研究し、普及させるのに大きく貢献した。クリスチャンの韓国語学者のうち、代表的な人物に限っても、周時経^{チュシギョン}、金允経^{キムユンギョン}、李允宰^{イユンジェ}、張志暎^{チャンジヨン}、鄭寅承^{チョンインスン}、丁泰鎮^{テジン}、崔鉉培などといった人々がいる。

李允宰の『우리말사전』, 金允経の『조선문자급어학사』(1938), 張志暎の『조선어전기』(1924), 『조선어철자법강좌』(1930), 崔鉉培の『우리말본』(1935), 『중등조선어법』(1936), 『한글바른길』(1936), 『한글갈』(1940) などはいずれもハングル研究とハングル保護の珠玉の労作である。

彼らは、日本統治下の1920年に朝鮮語研究会 (後の朝鮮語学会) を組織し、ともに活動してきたが、1942年、日本による韓国語弾圧策の一環であった朝鮮語学会事件にその多くが連座し、過酷なる獄苦を^な嘗めた。うち、李允宰は収監中の1943年12月に獄死した。彼らの労苦がなかつたら、今日の水準の、韓国語とハングルの保存と発展は難しかったかもしれない。

5. 韓国語文学とキリスト教

韓国語の近現代文学にキリスト教信仰やキリスト教思想体系が与えた影響を調べてみると、韓国の近現代思想史全般に及ぼしたキリスト教の影響力と比べ、存外にも小さいことが分かる。これは、キリスト教があまり広まっていなかった日本において、刮目すべきほどの水準で展開されたキリスト教文学のありようとは、対蹠的な側面に違いない。その理由は多岐に亘りうるが、筆者は、韓国近現代史の極端な歴史的受難、すなわち、国権喪失と植民地体験、そして、その後の民族

分断と戦争, 激しいイデオロギー対立という, 歴史のありようとこれを結び付けて見る. すなわち, 個人と共同体の宗教的覚醒と内面的体験よりもさらに切迫した歴史の実存経験が, この時代の文学の大半の主題として想定され, 相対的に宗教文学は貧弱なものとなったという背景理解である. しかし, 個々の作家の, キリスト教との関連性を追尾してみると, 必ずしもそうではない.

韓国の近代文学の先駆者であり, 最初の近代小説作家として挙げられる, 李光^{イグァン}洙^スの場合を見てみよう. 彼は, 最初の日本留学時代, 東京白金の明治学院の時代に, キリスト教に初めて触れた.

「(李光洙は) 明治学院普通学部三年に編入した. 李光洙の日記や自伝によると, 明治学院に入学して初めて聖書を読み, キリスト教と出合った. 彼の代表作である『無情』の主人公・李亨植と『有情』の主人公・崔哲は, ともに東京のキリスト教学校への留学経験があるクリスチャンの教師という設定である. 明治学院でのキリスト教との出会いは, 彼の文学作品にも大きな影響を与えたものと見うる。」—— 서정민(2014:233)

しかし, 李光洙のキリスト教理解は, 理想と現実, 本質と現象の乖離という側面から表皮的受容へと流れていく. 彼は, 結局, 思想遍歴のひとつとしてのキリスト教, より広くは, 西欧思想の一端としてのキリスト教理解に留まった. 李光洙は, 自分にとって, 刺激と挑戦になった文学, 思想, 価値の一断面としてのキリスト教を語り, 彼のキリスト教は, 倫理的命題として判断されるキリスト教であることを前提とした. 明治学院時代は, キリスト教のみならず, 古今東西の文学や思想, 日本の自然主義文学をはじめとした近代文学, ロシア文学とトルストイの思想まで渉猟した時期であった. 서정민(2014:240)参照. この過程において, キリスト教については, 結局, 表裏不同の批判的対象として投影されたりもした.

「私は礼拝堂にも通ってみた. しかし, その礼式とことばはみな, 私を満足させてはくれなかった. 私が聖書を読み思い描いていたキリスト者は, どこにも見つけることができないようだった. キリスト者は外見からして普通の人とは異なり, 質樸としていて, 溫柔で, 謙虚, そして, 何か高潔なる光を発していなければいけないように思われた. …… 一方で幻滅の悲哀を感じると同時に, 一方で反感が生まれた。」—— 이광수 『나의 고백』 より.

서정민(2014: 237-238)

結局、留学から戻ってきたあと、本格的な作家として活動を始めた李光洙は、「キリスト教に対する批判論者」の立場で、大々的な論説を展開した。それが、1917年の李光洙の論説「금일조선예수교회의 결점 (今日の朝鮮キリスト教会の欠点)」(『청춘(青春)』第11号, 1917年11月号)である。当時の韓国の教会の階級主義, 教会至上主義, 宣教師の無識, キリスト教の迷信的要素, 改革的姿勢の不足などが、その批判の核心であった。これには、勿論、当時の韓国の教会, 現在の教会, いずれにとっても十分に傾聴すべき内容が含まれている。

しかし、李光洙のキリスト教理解とその批判はいずれも、自身は一定の距離を置き、客観的立場に立って議論する姿勢であった。そして、自らの基準となるキリスト教は「文明史的理解」の次元のキリスト教, 「当為的キリスト教」が前提とされていた。以上, Suh, Jeong Min(2016)参照。

一方、尹東柱^{ユンドンジュ}は、祖父から3代目、クリスチャン家系の「ボーン・クリスチャン(born Christian)」として出生した。特に、彼の家門は、理想郷を建設しようと、開拓移民として間島^{カンド}の明東村^{ミョンドンチョン}に移住した「先駆者」家門の一員であり、村の精神的基礎をキリスト教に求める共同体であった。こうした環境で幼年期から明東教会と明東小学校でキリスト教教育を受けて育った。のみならず、彼の全生涯でもあった学生時代の大半をキリスト教系の学校で修学した。すなわち、明東小学校以降、間島^{ウンジ}の恩真中学校、平壤^{スンシル}の崇実中学校、ソウルの延禧^{ヨンヒ}専門学校、日本留学後の東京の立教大学と最後の京都の同志社大学まで、すべてキリスト教系の教育機関であった。このことは、そのまま尹東柱の生涯とキリスト教の密接な関連を内包する。彼は、同時代の最も代表的なキリスト教知識人であった。

このようなキリスト者としてのアイデンティティと信仰的内面は、そのまま彼の作品にも直結している。尹東柱の代表作であり、その作品精神の根幹となっている「序詩」にまず注目してみよう。

“하늘을 우러러”の‘하늘(heaven)’は、読み手によってすべて異なる‘하늘’でありうる。ひとつ特記すべきことは、尹東柱の詩集『하늘과 바람과 별과 시』の日本語翻訳史においてよく議論される、語彙の選択である。すなわち、‘하늘’を「空」と訳すべきか「天」と訳すべきかである。勿論、各言語には、その言語が持つ、より含蓄的な意味が別があり、特に詩語の場合には、一律的にニュアンスを断じえない、文学的側面が勘案されねばならない。しかし、尹東柱の‘하늘’

は ‘우리러’ とつながっており、さらに, “한 짐 부끄럼” と関係づけてみなければならぬであろう. ここで, キリスト教の「罪」を連想する.

「罪意識」は, 宗教文化的な背景が重要である. 大概, 洋の東西の文明史的差異において, 罪意識は相互に区分される. 西欧的な言語では「罪(sin)」が重要であるが, 東洋的な言語では「恥(shame)」が重要である. このとき, 西欧の「罪」は, 神(God)の前における「ひとり」のものだが, 「恥」は, 人々の前における「破廉恥」に主眼が置かれたりもする. 尹東柱は ‘하늘 (天)’ (Heaven)を仰ぎ, 恥ひょうを表した. 東洋と西洋の概念はこうして自ずと合致した.⁵⁾

詩がこれほどもたやすく書けるのは

恥ちずかしいことだ. —— 尹東柱「たやすく書かれた詩」より

どの王朝の遺物であるので

このようにも辱められるのか

.....

その時 その若いぼくに

なぜ そのような恥ちずかしい告白をしたのか —— 「懺悔録」より

夜を明かして鳴く虫は紛れもなく

恥ちずかしい名を悲しんでいるのです. —— 「星をかぞえる夜」より

尹東柱の罪の意識, 恥の意識は, さらに続けて表現される. ‘욕되다’ (disgrace) という表現も登場する.

このような断片的な根拠だけでも, 尹東柱のキリスト教は既に, 「文学」の内容へと移り渡っていることが感じられる.

しかし, 尹東柱と彼のキリスト教において, より明瞭で重要な関係の側面は, 「最後の希望」であり, 「イエス・キリスト」への実存的移入である.

5) 【訳者註】 尹東柱の詩の日本語訳はすべて『尹東柱詩集 空と風と星と詩』(金時鐘編訳, 岩波書店, 2012年)によった. ルビも同書のまま. 本書の書式に合わせ, 「,」は「,」, 「。」は「.」に変えた. 本論文の韓国語原文で太字になっている箇所は同様に日本語訳でも太字にした.

ついてきていた日射しだったのに
いま 教会堂のてっぺんさきの尖の
十字架にひっかかりました。

尖塔があのようにも高いのに
どうすれば登っていけるのですか。 —— 「十字架」より

「ついてきていた日射し」が「肯定的希望」であるという事実は、特段の敷衍を必要としないであろう。自身の歴史的事実において経験される極限の絶望、そこで発見する唯一にして最終的な希望を意味する。それがまさに十字架の尖端についている。尹東柱の事実と彼の詩は、悲哀美に満ちた詩語によって一致している。

ところで、尹東柱のキリスト教と文学を理解するには、さらなる想像が必要である。彼のキリスト教は、キリスト教の教理や組織や共同体にただ形式的に帰結されるものではない。彼の信仰は、極めて、神秘主義的である。イエス・キリストに自身を移入、合一する、より深い宗教的希望と願いまで表している。尹東柱はイエスのようになりたかった。少なくとも、苦難の極みで、「花のごとく赤い血を」、かくのごとく流したかった。

さいな
苛まれた男、
祝福されたイエス・キリストへの
ように
十字架が許されるならば

こうべ
首をもたげて
花のように咲きだす血を
陰ってゆく空の下で
しずかに垂らしています。 —— 「十字架」より

以上、Suh, Jeong Min(2016)参照。

ここでは李光洙と尹東柱を直接比較してみた。これはそのままキリスト教が韓国語文学に及ぼした影響の次元をスペクトラムで見せてくれる両極端の例と言い

うる。すなわち、李光洙の場合と尹東柱の場合の間に、韓国語近現代文学とキリスト教の関係の大半を論ずることができるであろう。無論、とりわけ、戦後になって、多様な形の文学ジャンルにおいて、キリスト教との関連性が^{あらわ}顕になる作品も展開されてはいるが、歴史的整理を成し遂げるためには、いまだ進行形の状況にある。

6. キリスト教の韓国語用語の生成、展開、教派別の差異

用語についても触れておこう。伝来、受容以降の韓国キリスト教の大部分の用語は、まず、中国語の漢字、あるいは一部は日本語の翻訳漢字を音訳して、そのまま採用したものである。聖書の翻訳や教会内の儀礼用語も、漢字からなるものは概ね同類のものと理解できる。

ところで、ここで韓国キリスト教の用語の最も特筆すべきことは、やはり、プロテスタントの聖書翻訳の過程から議論されてきた「神」の呼称である。勿論、中国語でも日本語でも、最も重要なものとして考慮しなければならない用語である。最初は、同じ漢字言語圏の中国語や日本語と同じように、「천주(天主)」、「천제(天帝)」、「상제(上帝)」、「신(神)」、「가미사마(神様)」などがすべて候補となり、議論された。しかし、韓国語への聖書翻訳と用語定立の過程で、韓国の歴史と文化の中の単一神論(Monarchianism, Henotheism)、あるいは唯一神論(Monotheism)、さらには韓国固有の「拝天思想(하늘숭배사상)」が参考にされ、結果的には、「하느님(하나님)」に定着した。これは、韓国キリスト教全体のアイデンティティとも直結する、非常に重要な韓国語のキリスト教用語である。

他にも、韓国キリスト教において、独自に形成された制度や集会などの名称として、例えば、「새벽기도회(早天祈祷会)」、「삼일기도회(三日祈祷会)」などを挙げうる。

一方、教派別に違いがある用語を見ると、カトリックでは、聖職者の職名として「주교(主教)」と「사제(司祭)」、呼称として「신부(神父)」が用いられるのに対し、プロテスタントでは、職名と呼称の双方において「목사(牧師)」という聖職名称がそのまま用いられる。その他、カトリックにおける礼拝を意味する「미사(ミサ)」は、プロテスタントでは、「예배(礼拝)」という語が用いられる。場所としての「교회당(教会堂)」という用語は、カトリックでもプロテスタントでも用いられるが、カトリックでは、「성당(聖堂)」、プロテスタントでは、従来は「예배당(礼拝堂)」、最近は「성전(聖殿)」という用語も用いられる。カトリ

ックの「영세 (領洗)」は、プロテスタントでは、「세례 (洗礼)」と呼び、プロテスタントの中でも特にバプテストなどでは、「침례 (浸礼)」と呼ぶ。一方、プロテスタントのひとつである聖公会は、ほとんどすべての用語をカトリックと同一のものを使用し、神学的には宗教改革の伝統に従うが、用語と儀礼はカトリックの伝承に立脚していることが分かる。このような教会内の用語は、韓国語圏では教会外でも区別して用いられることが多く、各教派の内部へ入ると、教会用語が各々忠実に用いられていることを窺い見ることができる。のみならず、聖書翻訳の過程を中心に広く知られているキリスト教の独特な用語、例えば、「에덴동산 (エデンの園)」、「노아의 방주 (ノアの方舟)」、「카인과 아벨 (カインとアベル)」、「출애굽 (出エジプト)」、「모세오경 (モーセ五書)」、「십계명 (十戒)」、「최후의 만찬 (最後の晩餐)」、「천당과 지옥 (天国と地獄)」、「십자가 (十字架)」、「사탄 (サタン, 悪魔)」、「성육신 (受肉, 藉身)」、「성탄절 (聖誕節)」、「부활절 (復活節)」などの用語は、キリスト教の信徒、非信徒を問わず、韓国語圏では大部分が通用しており、その基礎的理解にはあまり問題がない。

7. 韓国語神学の歴史と現況

韓国のキリスト教神学は、基本的に未だ大部分が翻訳神学である。西欧の神学思想、用語概念をそのまま踏襲して来、大半の神学的思潮もそこに準ずる。韓国で生成された教派グループもいくつかあるにはあるが、大部分のプロテスタントの教派はすべて西欧のキリスト教から宣教されたものであり、移植された共同体として神学的思惟や独特の告白的概念もすべて本流の教会のそれに従っている。よって、とりあえず、1960年代から1970年代以降、いわゆる韓国キリスト教の内部からの、いわゆる「状況神学」⁶⁾が台頭する前までは、厳密な意味での「韓国語神学」は不在であった。

しかし、いわゆる「土着化神学」⁷⁾、「民衆神学」⁸⁾に代表される韓国神学が創

6) キリスト教の神学のうち、いわゆるコンテクストを重視する視点から歴史と状況の中で生まれるアジェンダをキリスト教の神学のテーマにして研究、実践することを表す、筆者の用語。例えば、韓国の「民衆神学」、北米の「黒人神学」、南米の「解放神学」、日本の「部落神学」などが代表的な「状況神学」である。

7) キリスト教の神学のうち、特定地域の文化、歴史、伝統などの文脈を中心にキリスト教の教えを解釈する神学の流れのこと。

8) 1970年代以降、韓国の軍事独裁政権の治下、人権侵害、経済的疎外などで苦しみを受けるマイノリティー民衆の立場より生まれたキリスト教の状況神学のこと。世界的な神学に発展し、韓国の民主化運動にも大きな貢献をした神学である。

キリスト教と韓国語 (徐正敏)

出され始め、韓国語は、韓国創出神学の中心言語としての位置を占め始めた。

未来のアジアのキリスト教、アジア神学の展開が予想されるなかで、中国語神学、日本語神学とともに、次第に韓国語神学の可能性も大いに期待されている。このこともまた事実である。

参考文献

基督教大百科事典編纂委員會編(1980-1992) “基督教大百科事典” 1-21, 서울 : 기독교 문사

서정민(2014) ‘이광수와 그리스도교’, “이광수는 누구인가?” (한일대조본), 大阪 : かんよう出版

최현배(1962) ‘기독교와 한글’, “神學論壇”제 7 집, 서울 : 연세대학교 신과대학

한국기독교역사학회편(2009-2012) “한국기독교의 역사(개정판)” 1-3, 서울 : 한국기독교역사연구소

徐正敏(2012) 『韓国キリスト教史概論 ——その出会いと葛藤』, 大阪 : かんよう出版

徐正敏(2015) 『韓国カトリック史概論 ——その対立と克服』, 大阪 : かんよう出版

Suh, Jeong Min(2016) “Christianity and Korean Literature” (résumé), *The International Conference on Christian Communication in East Asia*, 2016.

10.29, Seoul: The Central Academy of Korean Studies, The Historical Society of Asian Christianity